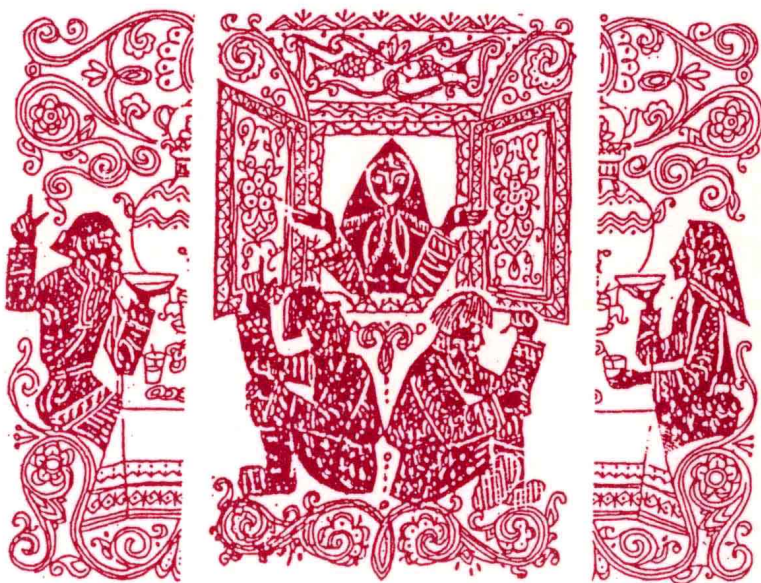

ロシアのフォークロア

フョードル・セリバーノフ 編著
金本源之助 監訳



早稲田大学出版部

ロシアのフォークロア

フョードル・セリバーノフ編著
金本源之助監訳



早稲田大学出版部

ロシアのフォークロア

1983年10月30日 初版第1刷発行

検印省略

編著者 フォードル・
セリバーノフ

監訳者 金本 源之助

発行者 城下 幸雄

発行所 早稲田大学出版部

☎ 160 東京都新宿区戸塚町 1-103
振替東京 3-1123 電話 (03) 203-1551

落丁・乱丁本はおとりかえします。 安信印刷・中條製本所
1098-3355-9314

日本語版への序文

いずれの民族にも、それぞれその民族の太古に起源をもつフォークロア（口承文芸）がある。

伝説、諺、民話、そして民謡等口承の作品は、世代から世代へと幾世紀にわたり語り伝えられ、歌い継がれてきた。それらは長い歴史の道程において、多くのものは、あるいは消えゆきあるいは新しく生れつつ、そのうちのすぐれた作品のみが幾世紀もの試練に耐えて今日まで生き続けてきた。

現代社会はその文化形態において往時のそれとは、おおよそ趣を異にするが、新しい真の文化は常にそれに先だつ民族的伝統の支えなくてはあり得ぬことは言うまでもない。口承の文芸は今や過去の文化的遺産となりつつある。とは言うものの、現代のあらゆる芸術は、口承の文芸を母体として生れ育ったのであり、それはまた現代の民族的芸術創造の主要な源泉のひとつでもあることに間違いない。

フォークロア即ち民衆の芸術には、民族の特性や、その芸術的思考の独自性、さらにその長きにわたる精神的発達過程の反映がみられる。

他国の、とくに近隣諸国の歴史や文化への関心、そしてそれら国々の民族的精華との触れ合いは、今日、世界の最重要事のひとつであり、諸国間の相互の理解と盛んな文化交流こそ世界平和への近道である。ささやかながらこの『ロシアのフォークロア』がそれらのための一助ともなればと願うものである。

本書には、ロシア・フォークロアの太古のもの、また比較的新しいものの基本的ジャンルの諸作品を選んである。言うまでもなくここに収めた作品は、ロシア・フォークロアのほんの一部にすぎないが、本書を通して日本の読者がわが国のフォークロアへの関心をさらに深めて下さる機縁ともなれば編著者としての幸い、これに過ぎるものはありません。

一九八三年七月

フョードル・セリバーノフ

民話	謎々	諺と慣用句	儀礼歌	日本語版への序文
77	61	43	1	

ブイリーナ

歴史歌謡

抒情歌

チャストゥーシカ

監訳者あとがき

125

151

167

209

儀
礼
歌



自然とその諸現象は古代人にとっては長い間不可解で謎に満ちたものであった。古代人の想像力は自分たちの周囲に、世界を支配し、人間の運命を左右するような空想上の存在を住まわせた。こうして人間自身が創造した神々や様々な靈たちに、人はその一族郎党が飢えや病気で死ぬことのないように促し、求めた。原始社会の人々の安寧は、川や森に魚や必要な獣がたくさん住んでいるかどうか、穀物がよくみのるかどうかが、家畜が無事で子供をたくさん生むかどうにかかっていた。超自然的な力を信仰していた古代人たちは、望ましい結果が得られるようにこの力にはたらきかける手段を探し求めた。

儀礼の本質はつまるところ、呪文の言葉や簡単な歌を伴うある種の順序だった行為が、来世に属する諸力にはたらきかけ、ものごとの必然的な経過を完遂させたり、あるいは逆に望ましくない現象を阻止させたりできるはずだ、という発想にある。言い換えるなら、儀礼は呪術的意味を持っていたのである。家族儀礼と呼ばれる儀礼は人間の一生における基本的なできごと——誕生、結婚、死——に結びついている。また別の儀礼は一生をと

おして厳密に定められた特定の日に行われるもので曆上儀礼と呼ばれる。

儀礼とそれにまつわる歌は、超自然的な力への信仰が失われていくにつれて、本来の意義は次第にうすれてゆき、休日や休息のひとつときの祝祭的気分を表現する遊戯的な形式となっていく。古い儀礼は生活の中から姿を消していったが、儀礼歌はロシア民衆のきわめて価値の高い遺産のひとつとなったのである。

曆上儀礼歌

はるか昔から東スラヴ人の生業は農耕であった。このことが豊富な収穫の確保を目的とした曆上儀礼の性格を条件づけた。収穫量は季節の天候に、最終的には日照によって左右された。古代の儀礼が、太陽の地球に対する位置の転換期——夏至と冬至、春分と秋分に定められたのは偶然ではない。後にキリスト教の教会が自らの祭日を導入するようになって、以前からの祭日は吸収、一体化されたが、なかにはキリスト教に関わりない独自性を保ったものもある。

冬季の祭日の歌

人々は昔から年が改まるごとに、自分の運命が変わったり、生活がよくなるのではないかと新しい期待を抱くのが常だった。ロシアの農民は新年の到来に「注目した」だけではなく、この期間に一方では豊年を祈願して自然にはたらきかけ、他方ではこの年にどんなことが起きるかを知らうと努めたのである。

異教時代から受け継がれた新年の祭日の期間は、キリスト教曆の枠によって旧曆の十二月二十六日（クリスマス）から一月六日（主顯節）までの間に限られていた。この期間に行われる最も興味深い儀礼はコリャダーである。クリスマスの前夜に若者と娘たちは陽気なグループを作って家から家へと巡り歩き窓辺で家の主人をほめたたえ、彼の幸福と家内安全を祈願してコリャートカ（「とよばれる儀礼歌」）を歌った。「これがコリャダーの儀礼である。」

コリャートカ歌いたちは家ごとに自分たちの歌の報酬として祭のために料理した食事をわけてもらった。彼らは「コリャダー」の名代として家々を回り、歌を歌ったのである。「コリャダー」は歌でほめたたえられる人々

にあらゆる願いをかなえるものであった。この儀礼の最初の意味は忘れられ次第に陽気な習慣となっていたのである。ある歌に「コリヤダー」たちが早く来ればよいのに、そうしたら心ゆくまで遊び楽しめるのに、といった願いが表現されているのも故なことではない。

特に陽気で楽天的な性格を持っていたのがクリスマス週間（クリスマスから主願節まで）の夜会であって、この時に人々は歌ったり、遊戯をしたり、踊ったり、陽気な仮装などをしたりした。このクリスマス週間、特に大晦日と主願節には占いが行われた。人々は自分たちの運命や収穫の大小を占い、娘たちは結婚占いをした。この占いは皿下の歌と呼ばれる歌を伴った。この歌がそう呼ばれるのは、この占いに不可欠な小道具が、大きな皿であったからである。この皿に水を注ぎ、占いの参加者はみな水の中に指輪を入れる。それから皿は布巾かハンカチでおおわれ、呪い歌が歌われた。比喩的な形式をとったこの小唄の内容は、歌のあとで引き出された指輪の持主の運命を予言するものであった。「また、伏せた皿の下から指輪が引き出されることもあり、「皿下の歌」の名

はここに由来する。」ある者には新年に花婿が見つかり、ある者には火事が（門の上に雄鶏がとまってる……）、ある者には死が（靴もうまくはけぬし、着物もうまく着られぬ……）予言されるのである。

コリヤートカ



ああ、早く、クリスマス週間が来ればよいのに、

アイ・リユリ、アイ・リユリ、早く！

行こうよ、うかれ騒ぎの集りに、

アイ・リユリ、アイ・リユリ、集りに！

さて行こう、うかれ騒ぎから婚約式に、

アイ・リユリ、アイ・リユリ、婚約式に！

さて行こう、婚約式から陽気なお遊びに、

アイ・リユリ、アイ・リユリ、お遊びに！

私は行こう、お父さんのところへ、

アイ・リユリ、アイ・リユリ、お父さんのところへ！

「さてお父さん、黒馬を一頭ください、

アイ・リユリ、アイ・リユリ、黒馬を！」

「馬だったらば、わが子よ、異存はない、

アイ・リユリ、アイ・リユリ、異存はない！

息子よ、馬で遊びに行け、

アイ・リユリ、アイ・リユリ、遊びにな！

だけど、息子よ、注意しろ、

アイ・リユリ、アイ・リユリ、注意しろ！

世間の人にとにかく言われぬよう、

アイ・リユリ、アイ・リユリ、世間の人に！」



やってきたよコリャダーが

クリスマスの前の日に。

きれいな緑の私のぶどう園！

初雪が降ったよ

真白な雪が。

きれいな緑の私のぶどう園！

この初雪に乗って

飛んでつたのはがちょうに白鳥。

きれいな緑の私のぶどう園！

コリャートカ歌いたちは

まだ年端もゆかぬ——

きれいな緑の私のぶどう園！

年端もゆかぬ

きれいな娘たちが

きれいな緑の私のぶどう園！

尋ね歩いて探しまわるのは

イワンの屋敷。

きれいな緑の私のぶどう園！

イワンの屋敷は

遠くも近くもなく

きれいな緑の私のぶどう園！

七つ目の里程標のあたり——

この屋敷のまわりを

きれいな緑の私のぶどう園！

銀の柵がとりまいて

柵のまわりは

きれいな緑の私のぶどう園！

一面やわらかな草

どの柵の上にも

きれいな緑の私のぶどう園！

真珠が一粒ずつ。

柵の中には

きれいな緑の私のぶどう園！

三つの高殿が立っている

金の屋根の高殿が。

きれいな緑の私のぶどう園！

最初の高殿に住んでいるのは

明るいお月さま。

きれいな緑の私のぶどう園！

次の高殿に住んでいるのは

赤いお陽さま。

きれいな緑の私のぶどう園！

三番目の高殿には

真砂のようなお星さま。

きれいな緑の私のぶどう園！

明るい月は――

屋敷のご主人。

きれいな緑の私のぶどう園！

赤いお陽さまは――

おかみさん。

きれいな緑の私のぶどう園！

真砂のお星さまたちは――

小さな子供たち。

きれいな緑の私のぶどう園！

当のご主人さまは

家にはおらぬ

きれいな緑の私のぶどう園！

家にはおらぬ。

モスクワにおでかけだ――

きれいな緑の私のぶどう園！

裁きのために

裁きのために。

きれいな緑の私のぶどう園！

そしてことを

とりおさめに。

きれいな緑の私のぶどう園！

裁きを終えて、仕事をかたづけ、

ご主人さまは家へと帰る。

きれいな緑の私のぶどう園！

奥さまにはおみやげに

貂てんの外套、貂の帽子を。

きれいな緑の私のぶどう園！

息子たちには

駿馬を一頭ずつ、

きれいな緑の私のぶどう園！

娘たちには

黄金の冠をひとつずつ。

きれいな緑の私のぶどう園！

私たちのコリヤダーは

小さくもなし大きくもなし

きれいな緑の私のぶどう園！

戸口からは入っていない、

窓から呼びかける――

きれいな緑の私のぶどう園！

「ちぎるな、割るな――

ピローグ*は丸ごとおくれ！」

きれいな緑の私のぶどう園！

* 酵母入りこね粉で作る一種のバイ――訳者

皿下の歌



桶の底であたしや麦粉を水にとく、

ばんざい！

こね粉の桶を黒貂の毛皮でおおう、

ばんざい！

こね粉の桶に輝く黄金のたがをはめる、

ばんざい！

こね粉の桶を柱の上に置く、

ばんざい！

ふくらめこね粉よ、縁まで一杯に、

ばんざい！

縁まで一杯、ふくらふくらめ、

ばんざい！



私は町のまわりに指輪をころがす、

ばんざい！

指輪のあとからついていく、

ばんざい！

ついて行って、花婿を見つける、

ばんざい！



雌鶏が家のまわりの盛土をほじってる、

雌鶏は黄金の指輪を掘りあてた、

あたしはその指輪をはめて婚約するの！

この歌を歌われた人は

そうなるわ、

逃げられないさだめ！

ばんざい！

麦粒が打穀場を転がって、

麦の山に転がり着く。

この歌を歌われた人はほんとにそうなる！

門の上に雄鶏がとまってる、

声は天まで、尾羽は地面まで。

この歌を歌われた人はほんとにそうなる！

靴もうまくはけぬし、着物もうまく着られぬ、

道の穴ぼこにはまれば、どうしてもぬけられぬ。

この歌を歌われた人はすぐにそうなる、

すぐにそうなる、それがさだめよ！

謝肉祭の歌

二月末から三月初めにかけて行われる謝肉祭は、冬から春への移行と結びついた祭である。陽気で底抜けに楽しいこの祭は丸一週間も続き、老いも若きも、特に若夫婦たちは丘をそりですべり下り、祭のために飾った馬を乗りまわした。若者たちは冗談を言い、笑いあい、歌いながら謝肉祭のわら人形を持って村中をねり歩いた。このわら人形は祭の最後の日に村の外に運びだされ、焼かれたのである。謝肉祭はある歌の中で馬を乗りまわし、喜びと豊饒をもたらす美しい女として描かれている。



あたしたちは謝肉祭を待ちうけた、
あたしたちは謝肉祭を待ちうけた、

リユーリ、リユーリ、待ちうけた！

ほおじろ鴨よ、小さな鴨よ！

丘にのぼったあたしたち、

丘にのぼったあたしたち、

丘をチーズで固めたよ、

丘をチーズで固めたよ。

あたしたちの丘はすべりよい、

あたしたちの村の娘は遊び好き、

新妻たちは陽気な女、

新妻たちは陽気な女、

ばあさんたちはぶつぶつ屋、

ばあさんたちはぶつぶつ屋。

ベチカの上にうずくまり、

みんなであたしたちにぐちを言う。

「おいばあさんたちよ、ぶつぶつぐちを言わないで、

謝肉祭を思う存分楽しませとくれ、

謝肉祭を思う存分楽しませとくれ、

若者たちよと遊ばせとくれ、

若者たちよと遊ばせとくれ、

まだひとり身の若者と